

## 第2回 佐久地域の高校の将来像を考える地域の協議会

日時：令和元年12月2日（月）

午前10時00分～12時00分

場所：佐久市役所8階大会議室

### 1 開会

### 2 あいさつ

（柳田座長）

本日は、お忙しい中ご参集いただき、誠にありがとうございます。

本協議会は、佐久地域の将来を見据えた高校の学びのあり方について協議し、県教育委員会に意見・提案することを目的に設置しております。前回の会議では、本協議会における協議の進め方について確認するとともに、県教育委員会から、高校改革の取組や佐久地域の高等学校の現状等について説明をいただきました。

本日の会議では、関係機関の意見等について聴き取るとともに、具体的なテーマに沿った意見交換を実施していく予定でございます。委員各位の忌憚のないご意見を賜りますようお願い申し上げます。

### 3 意見聴取

#### （1）小諸市で進んできた協議の経過等について

（柳田座長）

次第3「意見聴取」の「（1）小諸市で進んできた協議の経過等について」、第1回会議において確認いたしましたとおり、本協議会では既に独自の検討組織が立ち上がり、協議を深めている小諸での経過等を勘案することとしています。また、前回会議において委員の中からも発言がありましたとおり、小諸での協議の進行状況について聴取を行うとしております。

そこで本日、協議会設置要綱第5条第2項の「必要があるときは委員以外の者を会議に出席させ、意見させることができる」旨の規定に基づき、「小諸商業高等学校・小諸高等学校統合に向けた実行委員会」会長である高見澤敏光さん、小諸高等学校長の寺島克彦さんにご出席いただきました。

冒頭、本日小諸市長の代理でご出席の濱村副市長からひと言いただいたのち、小諸市で進んできた協議の経過等について、高見澤会長からご報告いただきました。

いと思います。

また、私も広域連合長の立場で、小諸高校、小諸商業高校の同窓会の皆様からこの地域の協議会を早く立ち上げてほしいとお話をいただいております。

小諸地域の皆さんには、協議を重ねていただいている中でお待たせをいたしましたこと、大変恐縮に感じているところではありますが、今日お話をいただく中で、この会議の進行に有意義なものとしていただきたいと思いますと思っているところがあります。

それでは濱村副市長、よろしく申し上げます。

(濱村委員)

貴重なお時間の中、私どもの地域の検討状況を説明する機会を作っていただきまして、本当にありがとうございます。

資料としては、資料1として配布させていただいたとおりとなります。私のほうから経緯等に若干触れさせていただきまして、その後高見澤会長から詳細について説明させていただきます。

まず、小諸地域では、明治の頃から私塾の小諸義塾という学校がございました。明治39年に閉校になった後に、小諸町立の小諸商工学校が開校、この商業科が小諸商業高校に、女子技芸部が小諸高校に発展してきているという経緯がございまして、以前は両校が一つの学校だったという背景がございます。

その後、現在はこの地域でも同じですが、この地域でも少子化が進み、小諸商業高校、小諸高校の両校の同窓会において、小諸地域から高校がなくなってしまうのではないかと強い危機感を抱いたところがあります。

そして、資料1、1ページが経過となりますが、平成29年の3月に両校の同窓会で連絡会がスタートし、その年の6月の同窓会の総会において統合に向けて検討していくことが了承されております。その後、平成29年12月21日に統合に向けた実行委員会が設立されております。

資料1の4ページになりますが、実行委員会の構成員といたしましては、両校の同窓会、両校の校長、行政として小諸市、小諸市教育委員会、さらに両校のPTA、市のPTA連合会、地元経済界の代表として小諸商工会議所、JA佐久浅間、他の行政機関として県の地域振興局、佐久広域連合、第三者の識見者として両校の校長のOBの方、加えてオブザーバーとして地元の県会議員、市議会議長に入ってください、各方面から多くの意見をいただきました。また、講演会も一度開きまして、全国で活躍されている方の意見を聞いて、我々の見識も高めてきたところがあります。

そして、この令和元年11月5日に実行委員会として、ホンモノに触れるリアルな学びを提供する「長野県小諸新校構想(案)」がまとまったところであ

ります。

ここからは、この実行委員会の会長である高見澤さんから詳細を説明させていただきます。

(高見澤小諸商業高等学校・小諸高等学校統合に向けた実行委員会会長)

ただ今、ご紹介をいただきました高見澤敏光でございます。

日ごろから、小諸市内の高校の教育の場の確保について、佐久地域の市町村や企業等の多くの皆様に温かな、そして力強いご支援をいただいていることに改めて御礼を申し上げます。また、本日は、貴重なお時間をいただきましたことに重ねて御礼を申し上げます。

まずは、両校同窓会が統合に向けて取り組んできた経緯と両校統合に向けた実行委員会の経過について、簡単にご報告させていただきます。

両校同窓会は、長野県教育委員会が第1次長野県高等学校再編計画案を発表し、県下各地で様々な議論が高まってきた平成22年頃から、同窓会三役が集い、少子化に向けての課題や、将来の統合も視野に話し合いを始めてまいりました。その後、話し合いは一時中断しておりましたが、県教育委員会の第二次高校再編案「学びの改革基本構想」が発表された平成29年3月を機に、小諸高校からの呼びかけによりまして、両校同窓会連絡会を発足し、再び統合に向けた協議が始まりました。

連絡会では、将来の生徒数が著しく減少するというデータを踏まえ、統合を前向きに検討すべきとの合意に達し、まずは、それぞれの同窓会総会において統合すべきとの賛同を得る議決の手続きを行いました。予想以上の少子化の進行は、市内高校の学校規模を含め変化の激しい社会に対応する新たな学びの展開をしていくためには非常に厳しい状況であり、このような状況に対応するため、当地域では、新たな学びの場の創出を目指し、小諸市のご支援ご協力をいただき、市内の関係機関と連携し、学びの場を検討する組織を立ち上げました。それが「小諸商業高等学校・小諸高等学校統合に向けた実行委員会」であります。

その後は、お手元に配布させていただきました活動経過にお示しのとおり、実行委員会において長野県小諸新校について協議を進めてまいりました。本日、報告させていただきます「長野県小諸新校」構想(案)につきましては、11月5日に開催しました第4回実行委員会においてご協議をいただき、委員の皆様からは、賛同や期待を寄せる発言を多くいただきました。そして、統合実行委員会としての構想(案)を本日の地域の協議会で説明することについて、会長一任の議決をいただき、本日に至った次第でございます。

以上、簡単に統合に向けた活動の経緯等の報告とさせていただきます。

次に、「長野県小諸新校」構想（案）についてご説明いたします。本日お示しする資料は、統合実行委員会において検討、協議された内容でございます。

8ページのポンチ絵とともに、6ページをご覧ください。実行委員会では、これまでの普通科、商業科、音楽科の学びを受け継ぎながら、長い伝統の中で培ってきた学びの成果をさらに発展させる新しい学びの場の創設を検討しております。

6ページの新校の「2 基本理念」、「3 基本方針」をご覧ください。理念、方針を貫くキーワードは「ホンモノ」です。生徒が地域のスペシャリストとともに地域の持つリアルな課題に取り組むことにより、地域を思い、地域を理解し、地域に貢献できる人材、さらに地域から世界に飛び出し活躍できる人材育成を目標としています。なお「ホンモノ」とは、人的な面では、地域の企業人や大学の教員、様々な専門分野の第一線で活躍するスペシャリストと考えております。学習課題としての「ホンモノ」は、地域の専門分野でのリアルな問題、特に商業に関する専門分野では、広く体験や経験に裏付けられた学びを「ホンモノ」と考えました。

これら「ホンモノ」の学びを実現するための仕組みについては、「4 学びのしくみ」をご覧ください。

(1)の「ホンモノ」に触れる学びの仕組みは、地域探求ゼミ、外部講師の積極的導入、生徒自らが考案する海外留学や海外研修、デュアルシステム等を中心に進めたいと考えております。

(2)では、学科横断型学習を導入したいと考えております。これまで普通科、専門科併設である小諸高校においても、普通科、音楽科を横断しての授業はありませんでした。そこで、市内にある3つの学科が共同して学ぶ場を導入していきたいと考えております。

(3)の個別最適化された学びのプログラムでは、多様なニーズに柔軟に対応する学びの仕組みの導入を考えております。幅広い選択科目、学科横断型カリキュラムに加え、全ての生徒が情報通信技術を活用し、生徒の能力、特性等に応じた学習ができるよう、最新の授業支援や校務支援のシステムを導入したいと考えております。

また、「5 学びを支えるしくみ」として、小諸コンソーシアムの構築や、学校の環境整備も重要であると考えております。

以上簡単ではありますが、これまでの検討内容について説明いたしました。未来を切り開く子どもたちのために地域と協働した新たな学びを進めることが、私たち大人の責任であり、そしてそれが地域活性化に繋がると信じております。

以上で説明を終わります。

(柳田座長)

お聴き取りいただきました内容を踏まえました意見交換は、次第の4において行いますので、まずはご報告の内容についてご質問がある方は、ここでお願いしたいと思います。

(西部委員)

聞いておりました、大変興味深く、こういったことが地域の活性化に繋がればいいなと思いました。

1点だけ質問させていただきたいのですが、将来そこに来るであろう中学生、小学生、若しくはその保護者等意見がどのように吸収されているのでしょうか。

例えば、2ページが一番上にワークショップの開催とありますが、ワークショップの中にそういった人が入っているのか、それとも広域から生徒を募集する関係からそういったことはしなかったということなのか、教えていただければと思います。

(柳田座長)

濱村委員お願いします。

(濱村委員)

まず、児童生徒については、会議にお呼びはしておりません。それは今後かと思っております。

その代わりに、実行員会には、小中学生の保護者の代表として小諸市のPTA联合会の方に入ってください、子どもを見守る立場、直接関わる立場で意見をいただいているところであります。

(柳田座長)

よろしいでしょうか。では、その他に何かありますでしょうか。

無いようですので次に進みたいと思います。「(2) 佐久圏域の市町村長の意見等」について、事務局から報告をお願いします。

(事務局 若林佐久市企画課長)

資料2に基づき説明

(柳田座長)

ただ今報告がありましたが、ご意見を寄せていただいた小諸市、立科町から補足することはございますでしょうか。

立科町長の両角委員、お願いします。

(両角委員)

本日の資料2に載っております私の意見ですが、ちょうどこの意見聴取のあった11日の日に県の教育委員会定例会の中で、蓼科高校のクラス減の検討がなされ決定された経緯がございます。

クラス増減については、県の教育委員会の決定事項となりますが、これまでの経緯について、皆さんお集まりですでお話をさせていただいて、どのような形で進めてきているのかということのご理解だけいただければと思います。

まず、蓼科高校は中山間地存立校で川西地域にございますが、旧第6通学区と旧第5通学区から、半々ぐらいの割合で生徒が通われています。120名定員の3クラスの中で、100名程度の入学者であり、その中には様々な思いを持った生徒がいらっしゃいます。例えば、中学校時代には、なかなか学校にいけない、人との対話が難しい、地域の中で埋もれてしまってこれから自分はどうしていけばいいのか分からないといった、様々な理由により前を向いていくことが辛いという生徒もいらっしゃいます。そういった生徒にも、私ども蓼科高校においては、中学の先生も交えて一人一人の子どもに向き合い、地域授業を進めております。

また、町を挙げて高校と連携する中で、皆さんご案内のとおり、ポプラアカデミーという公設の学習塾を学校内に設け、中学の生徒も含めて、蓼科高校生、大学生も学んでおり、いわゆる学びの改革に向けた取組を進めております。

さらには、前回も申し上げましたが、「蓼科学」という地域学もございまして、「信州学」の先駆けとして、県よりも5年前から進めてきております。

加えて、蓼科高校の2学年、3学年は、「進学コース」、「環境・地域デザインコース」、「福祉コース」と大きく3つの特色あるコース制としております。このような状況からも学級数は3クラスがベターではないかということで、県教委には、9月以降4回ほど、それぞれの立場の代表が伺ってお話をしてきた経過がございます。しかしながら、最終的には、県教委の決定として来年度から2クラス編成という結論になったということでもあります。

県教育長はじめ、教育委員のご意見の中では、「蓼科高校はしっかり地域を挙げてその地域の教育を支えている学校であり、蓼科学をはじめ特色ある地域高校としての存在意義は十分に理解している。今後とも県と地元が互いに手を携えて、蓼科高校存続に向けて頑張っていきましょう」というお言葉をいただいております。そういった関係の中で、この11月11日は資料2にあるような発言となりましたが、現在、私どもは前を見据えて素晴らしい高校像を持つ

ていきたいと考えております。

本日、ご出席の皆様にも深いご理解と、これからもご協力を賜ればありがたいと思うところであります。

(柳田座長)

ありがとうございました。

それでは小諸市という立場で、濱村委員さん何か補足はありますでしょうか。

(濱村委員)

私からはございません。

(柳田座長)

わかりました。

それでは「(3) 佐久圏域の教育委員会の意見等」について、事務局から報告説明をお願いします。

(事務局 若林佐久市企画課長)

資料3に基づき説明

(柳田座長)

続きまして、「(4) その他」として、事務局からお願いします。

(事務局 佐藤佐久市企画部長)

私から、その他として2点ご意見をいただけてきましたので、ご報告させていただきます。

1点目として、佐久市内の金融機関と佐久市長を交えて意見交換会を行っております。その中で、高校再編のことが話題となりまして、ご意見をいただきましたのでご報告します。

産業構造として、佐久市や佐久地域は建設業が多い状況にあり、人材育成、確保というものがこれから必要となってくる中、佐久地域には建築系、土木系の科がある高校がなく、一番近いところでも上田千曲高校になってしまうというお話がございました。地域での人材確保という観点から、そのような科の必要性も検討いただければありがたいとの意見でした。

もう1点は、当協議会を設置するにあたり、各市町村の担当者と打ち合わせをする中、中山間地存立校が所在しない近隣の町村の役場担当者から、中山間地存立校が地域で果たす役割は非常に大きく、学びという場だけでなく様々な

役割があるとのことご意見もいただいております。

(柳田座長)

それでは引き続きまして、次第4「意見交換」を行いたいと思います。  
まず、意見交換の進め方について、事務局から説明をお願いします。

#### 4 意見交換

【意見交換のテーマ】 「地域の中学生の期待に応える学びの場」とは  
＜ポイント＞

- ①佐久地域の高校に望むこと
- ②佐久地域の高校生に身に付けてもらいたい力
- ③佐久地域が期待する学びの場

(事務局 若林佐久市企画課長)

意見交換のテーマ、ポイントを説明

(柳田座長)

ただ今事務局から説明がありましたとおり、「地域の中学生の期待に応える学びの場」とは何かをテーマとして、協議を円滑に進める観点から、協議のポイントに沿いながら意見交換を進めてまいりたいと思います。

それではまず、ポイント①「佐久地域の高校に望むこと」でございます。このポイントに着目して、皆様からご意見をお願いします。

(相馬委員)

国では、AI人材、IoT人材といった人材を育てなければいけないとしています。しかし、AI、IoT人材としての才能を全員が持っているわけではないと思います。

例えば佐久市の野沢北高校には、新海誠さんやLINEの社長さん、武論尊さんもしばらくはいらっしゃいました。たった一人でも、二人でも、そういう人材が出る場があれば、地域は全国的に有名になります。そういう人材をいかに育てるか、地元に戻ってきて現場で働く人材も必要であります。それをまとめるリーダーシップを持った人材も必要だと思います。佐久には有名な私立高校もありますが、それこそ全国募集の中でスポーツだけでなく、進学校としても全国で勝ち残っていくという戦略もあると思います。

私は、野沢北高の評議員をやったことがあるのですが、高校入試の点数が意



外と低いとお聞きしました。佐久地域は、塾といった小学生、中学生の勉強する環境が整っていないということになるかと思います。ところがセンター試験になると野沢北高生の点数は高くなる。一番化ける高校だと説明を受けました。

そういう意味でも地元リーダーを育てる進学校があるということは、非常に大切だと思っております。

(柳田座長)

ありがとうございます。他にご意見等がありますでしょうか。

(塩川委員)

先ほど、小諸高校と小諸商業高校の統合の話の中で出ました資料の中で、「小諸コンソーシアム」という新校を中心とした共同体がございました。学術機関、地域社会が一つになってみんなで子どもたちを育てていく、これは地域の高校に望むことというよりも、これからの高校のあるべき姿かなと考えております。地域、地域社会と一体となった学校というのが皆さん望まれていることかと思えます。

私は今、小諸市の教育委員をやらせていただいておりますが、確実に子どもたちは、毎年毎年減っております。小諸市では、小学生がだいたい2,000人ぐらい、中学生が1,000人ぐらい、併せて3,000人いますが、あと5年、10年しますとさらに激減していくといわれています。

この子どもたちが高校生になって、その先もちろん大学に行く子もいると思いますが、その後、佐久地域に戻り新しい社会を作っていく、そんなことのためにも小諸コンソーシアムという考え方は非常に重要だと思います。

佐久地域の高校に望むことといたしましては、やはり地域全体で学校づくり、それから社会をつくっていくことが大切だと思います。

(柳田座長)

ありがとうございます。他にはいかがでしょうか。

(由井委員)

先ほど、小諸商業高校、小諸高校の統合の動きについてお聞きしましたが、当然のことながら、例えば校舎が老朽化しているなどの高校が持っている問題もあるかと思えます。

また、親が考えていること、我々の世代が考えていることと、実際に入学する子どもたちが考えていることとかなりのずれがあるような気がします。もうかつての高校で、新しい若い子どもたちが学ぶという場が保障、担保されるの

かと考えると、私は非常に疑問に感じております。早く今の若い子どもたちが望むような高校を作らなければ、私学の方に行ってしまう、あるいは地域を飛び越えて遠くまで行ってしまうということが起きてしまいます。

私は野沢北高の出身ですが、佐久地域としては、それぞれの高校、それぞれのOBが自分の学校のことにとこだわり、色々なことを言って、どんどん遅れていくというのは避けるべきだと思います。早く新しい観点で新しい教育ができる高校を作って、地元の中学生たちが地元で学ぶことに自信をもって、夢をもって取り組めるようなことをしていくことが我々の使命ではないかなと思っております。この議論は早く、即刻前に進めてもらいたいと考えます。

(柳田座長)

ありがとうございます。他にはいかがでしょうか。

(西部委員)

私は、名古屋出身なので、高校は沢山あって選択は自由にできました。

この地域では、人口減少が激しいこと、交通インフラが乏しいこと、あまりにも通学区が広域すぎること、この3つの観点を考えると、高校が特徴を持ちすぎると、選択肢が少なくなってしまうのではと感じます。

例えば、南佐久郡に住んでいる子は、小海高校か佐久市内の学校というように交通機関の関係上、選択肢が絞られるかと思えます。そのような中、各高校が特徴を持ちすぎると選択肢が結果的に少なくなります。

また、保護者からすると、普通科に期待するところは、いわゆるモラトリアム、選択を先延ばしする機能だと思います。大学に行くのか、短大に行くのか、専門学校に行くのか、就職するのかを先延ばしする機能をやめるとすれば、中間層、選択をしきれない中間層の子たちには、蓼科高校がやっているような選択する学習ができる高校が必要かと思えます。つまり、大学のようにいろいろな授業を選択できるとか、体験でも決められたものをするのではなくて、自分で自主的に取れるとか、由井委員のおっしゃったように子どもたちが望む学びができるようなシステムが必要だと思います。高校側の善意で現在やっているのは十分わかりますが、システムとして実施してくれれば保護者として安心して、中山間地でも体験を重視する高校があるということで、子どもを送り出せる状況ができるのではないかと思います。

(柳田座長)

ありがとうございます。他にはいかがでしょうか。

(両角委員)

今、西部委員が言ったことはそのとおりだと思います。

蓼科高校は、川西地域にあって、いわゆる中山間地の高校で、ご存じのとおり鉄道沿線にもありません。ましてや人口の減少が激しい地域であり、農山村地域の中にあります。そのような環境の高校として、交通の利便性、魅力、将来にわたってどのような学びをするのか、上を目指すのか、そういったことを含めて中学生が選択をすることとなります。

その中で、私どもが申し上げているのは、地域が作った地域の高校を守り、育むという基本であります。現在、田中駅、東小諸駅、中込駅、そして以前からの依田窪からもバスを出して、県立ではありますが公立の学校ということで、定期の半額を補助し、町を挙げての支援をしています。

先ほど申し上げたポプラアカデミーも、地域の皆様から知恵をいただき、それを原資にして学習塾を運営しております。最終的には、その子どもたちが進学したり、就職したりする中で、いかに自分の将来を考えるかということも含め一つの学びの場になり、地域と学校の連携、広域的な連携がしっかりと根差さないと、これからの少子高齢化社会の中で子どもたちは埋もれてしまうのではないかと思います。

ただ単に学校に行って学んで、上の学校に進学できればいいということではなく、子どもたちがいかに自分を活かし、いかに自分の将来を描いていくか、中学から高校の段階でしっかり位置付けていく必要があると思います。

私どもも大変な経費をかけていますが、地域で生まれ育った人たちが、地域に帰って来て、地域を盛り上げるというのが、これからの佐久地域の発展に繋がっていくと思います。

本日お集りの皆様は、それぞれのお立場もありますし、都市部の学校も中山間地の学校もありますが、それぞれが、それぞれの持っている特徴を自分たちの身勝手にやるのではなく、地域全体でその良さをカバーしていく体制づくりを学校・地域でできればありがたいと考えます。

(柳田座長)

ありがとうございます。他にはいかがでしょうか。

(西部委員)

皆さんにお聞きしたいのですが、小諸の場合は、小諸高校、小諸商業高校の同窓会が、高校の外側で組織を立ち上げて地域の皆さんで支えていくような組織を作られたのかと思います。

他の地区の高校でもそういう組織を持っているものなのではないでしょうか。誰が声

を上げたらそのような組織が作られるのか私は全く実例がわからないので、お教えいただけないでしょうか。

(柳田座長)

県教委のほうで、そうした地域とともに高校を支えあっていくような、コンソーシアム的なものがあれば、把握している範囲で紹介ください。

(事務局 駒瀬長野県教育委員会事務局高校教育課教育主幹)

様々な形で、高校を支える組織がそれぞれの地域でできているとお聞きしています。

顕著な例としては、白馬高校がこの度、文部科学省の事業の対象となりまして、白馬コンソーシアムというものを立ち上げ、様々な人に参加していただくこととなっています。また、白馬高校は学校運営協議会を設置しており、地域の村長さんをはじめ関係者が運営について意見を言い動いてきたという経過がございます。

その他にも様々な形で、同窓会やほかの団体等にご協力をいただいている学校も多々ございます。

(西部委員)

おそらく自分の地域の高校をなくしたいと思っている人はあまりいないと思います。支援したい思いはあるけど、機会があれば協力したいけど、でも自分で手を挙げるのはと思っている方は結構いるのではないのでしょうか。誰が手を挙げるかで尻込みしてしまい、時間だけが経ってしまうということがありがちかと思えます。

そこで、誰が一番手を挙げるのがスムーズにくのか実例をお聞きしたいです。先ほどの白馬の話は役場が主体なののでしょうか、高校が主体なののでしょうか。

(事務局 駒瀬長野県教育委員会事務局高校教育課教育主幹)

高校が主体となり、我々県教委も協力していく形になります。

以前から白馬高校に対しては、地域から高校を支えていく根強い動きがございましたので、そういった素地があったということになるかと思えます。

(西部委員)

私は、行政がそういった組織を作ることに非常に違和感があるのですが、行政がそういった高校を支える組織を立ち上げて構わないのでしょうか。

(柳田座長)

行政としての関わりというよりも、白馬高校については、当時私も県会議員という立場で承知しておりましたが、この北安曇郡は、人口の減少の仕方が佐久地域よりはるかに深刻な状態で、高校存続というのは大きな社会問題になっていました。

その中で、先手を打った形だと思います。白馬高校を残そうという思いの方々がどうすればいいのか考えて結果として、そういった会議体を作ったという形です。その中心には結果的に白馬村というのもあったかと思いますが、白馬村が仕掛けたというよりは、そういう思いの強い方々が会議体を作っていたということが私の印象です。県下を巡った中で、行政がなにか主体になって行ったというのは、多分上がってこないのではないかと思います。

付け加えると、高校再編を行う中で、そういった深刻な状況を経た地域というのは、高校を支えていこうという気持ちがとても強くなり、そういったネットワークができてきた印象を僭越ながら感じているところであります。

(西部委員)

そういう人が出てきてくれればということになるのでしょうか。

(柳田座長)

というよりも、様々な方面から手を挙げていくことは可能で、そういった熱意が高校を支えていくことに繋がっていくのではと思います。

よろしいでしょうか。他にございますか。

(藤原委員)

私も、平成10年頃の高校再編については、当時県教委から委員を仰せつかってやっていました。最初に学区の再編があり、地域高校の存続の問題が挙げられて、その次には本格的な高校の再編の話でした。

当時のことを思いますと、様々な難しい問題があると感じておりました。一つは、教育目的とは別に、高校には、その地域における存在価値、高校があるということ、いろいろな価値観を生み出せるという、そういう存在機能があるということです。それから、どの高校も明治から名を変え、形を変え、学科を変えて存続してきた学校でありますから、非常に卒業生の母校愛というものが強くて、それがネックになってなかなか進まなかったということも経験しております。

今回は、人口減少から始まって、地域の活性化の問題など、本気で考えなければいけない時期が到来しているのかと思います。ですから、最少の不利益で、

最大の効果を出すのが必要かと思えます。

一次の再編の時に、私は、個人の案として、県の教育委員会にレポートを出しております。その当時は、おそらくとんでもない発想の話として棚上げになってしまったと思えます。

南佐久には小海高校があつて、地域高校として大変頑張っています。小海高校は元々実業高校です。長野県内の高校のうち相当数が、かつては実業高校として発足しております。まさに小海高校は、実業校として、元は農業の高校だったのです。地域の産業に直結する学問のできる学校をもう一度、数はともかく再現して考えてみてはどうかということを私は提案しました。

その時の提案の内容の中では、県内には信州大学がありまして、伊那に農学部、松本に医学部、長野に教育学部というように散在していますが、野辺山に農学部の農場があります。しかし、全く何も使われていませんでした。そして、川上村にも筑波大学に演習林として村営地を300ヘクタールほど貸していましたが、地域には全く還元もなく、何の研究をしているのかもわからない状態でありました。地域に技術の還元もなく、ただあるだけという状態です。そういうものを一緒に使わせてもらって、同じ教育支援であり、公立の大学ですので、県が高校教育に使えるようにしたらどうかということです。

また、小海高校がもし本当に存続できなくなれば、県立で市町村営の高校を作つてはどうかという案も出しました。その高校では、「高冷地野菜学科」という新しい学科、そして信州落葉松の原産地でありますので、「落葉松森林学科」という二つの学科を作つて、地元の産業協力をしっかりやることを提案しました。

高原野菜は、北海道から九州まで競合しない産地で作られていますし、北海道落葉松は今、長野県の落葉松より有名になっています。このような専門課程をつくつてもっと掘り下げた教育をしていくことで、生徒の確保ができることを提案したというわけです。

しかし、今まさに、もう一度そういうことも考えて、教育資源は県内にあるのでそういうものを活用していくことがとても重要ではないかと思うのです。是非、長野県教育委員会にあえてまたお願いするわけですが、こういったことも考えて長野県全体の教育レベルを上げたり、新しい産業を創出したり、本当に特色のある学校を作り出していただきたいと思えます。

例えば看護学校は、県内各地にあつて、地元に残る方が多いと思えます。技術も人も残るようなそういう教育環境を作っていくのも大事ですので、県教育委員会には、その辺もよく検討いただきたいと思えます。

(柳田座長)

ありがとうございます。他にはいかがでしょうか。

(黒澤委員)

ただ今、川上村藤原村長から大変心強いお言葉と、画期的な案をお聞きしました。

私は、小海町長になりまして、小海高校の皆さんと話をする中で、小海高校は、一人ひとり本当に細やかに生徒に向き合って教育をしているということを感じています。小海高校は、1907年の創立ということで、臼田高校の分校としてスタートして110年を超えている学校になります。

私が一番感心したのは、100名ちょっとの生徒数ですが、就職が1割います。進学ありきではなく就職もある学校の中で、一人の男子生徒が小海町役場への就職を希望してくれました。成績もとてもよく、面接でも、大学へどうして行かないのか聞きましたら、「大学に行って4年間学ぶ時間がもったいない。私は小海の町のためになりたい」ということ話していました。その言葉を聞いて、私はその子を合格という決断をしました。今求められているのは、藤原委員がおっしゃったように、地域に密着した教育というものがいかに必要かということになってくるかと思います。

佐久の中にもそういった中山間地の高校があり、成績が上位の高校、そうでない高校と色々あるかと思いますが、それぞれ生きていくのは同じです。その中での特徴の出し方というのを我々も再認識していく必要があると思います。

(柳田座長)

ありがとうございます。他にありませんでしょうか。

無いようですので、続きまして、ポイント②「佐久地域の高校生に身に付けてもらいたい力」について、意見交換をしていきたいかと思っています。いかがでしょうか。

(木次委員)

先ほどの①の話とも重なるかと思いますが、病院の立場から少しお話しさせていたきたいと思います。

少子高齢化というのは、病院にとって大きな影響がある課題であるとともに、医療や福祉を支える職員の確保ということも大変重要なものであります。そういう状況の中で、一人でも多くの方に地元で活躍していただきたいと考えた時、蓼科高校さんのパンフレットにある「福祉コース」のような専門の教育をして

いただけるコースがあることは、大変ありがたいと感じます。

また、地域に残って、病院などで働いて、活躍していただく人に期待することとしては、人が好きだとか、人を愛することができる、自分で考えて行動ができるといったことが重要ではないかと考えています。

これから病院で働く人たちに期待するのは、地域、患者さんと病院をしっかりと結んで対応できるということで、こういった人材を育てていただきたいと思います。

(柳田座長)

ありがとうございます。他にはいかがでしょうか。

(藤牧委員)

高校生に身に付けてもらいたい力ということですが、医療とも重なる部分もありますが、介護業界の私の立場から発言させていただきます。

現状においては、やはり介護従事者は不足し、事業の継続が難しいということが、佐久圏域介護保険事業者連絡協議会の事業所の方からも寄せられております。今後の人口減少社会の到来という中で、人材の確保というのは、より難しくなっていくと考えております。その中、先ほどもお話がありましたが、AIやICTの活用については、地域の課題解決や、生産性の向上において必要となっていくと思っております。

また、生徒には、地域の生活の状況をよく知っていただけるような高校時代を過ごしていただければと思います。小諸新校でも体験型の学習という話があったように、そういった経験をすることが大切であると思います。バーチャルな世界ではなく実世界で、見て学んでいただきたいと思っております。

実際に、中学生の体験学習というものが今もあります。私も、所属の法人で採用などの面接もさせていただいているのですが、中学の時に福祉体験学習を通して介護に興味を持ったというような方が何人かいらっしゃいます。体験を通して介護に興味を持ってもらい、進学して知識を得て就職していただけるといっても実際いらっしゃるのです、高校でも地域の介護保険事業者と協力関係を持ってやっていただければと思います。

(柳田座長)

ありがとうございます。他にはいかがでしょうか。

(堀内委員)

小諸新校の話をお聞きしますと、大学が目指していることに本当に近いと感



じます。体験したり、横断的に授業をしたりなど、佐久大学が目指しているところと同じで、やはり大学と高校は一体化していくと聞いて感じました。

藤原委員がおっしゃったように、佐久という地域を考えたときには、地域に重要な人たちを育てる高校というのは大事なことだと思います。今、約半数の生徒が大学に進学していますので、実業的な高校においても、そこで終わりというわけではなく、その後も実業的な大学に進むといった、先も見据えたことも考えてもらいたいと思います。もちろんそこで就職ということでもいいですが、生涯学習ですので、地域で就職してからも学習できるような、佐久大学ではそういった人を育てたいと考えております。実際には、大学も高校と関わりながらやっていかないといけないなと思っております。多分、同じように中学は、高校とつながっていかねばいけないのではないのでしょうか。

次に、先ほど西部委員が「普通科はモラトリアム」とおっしゃいましたが、私たちの大学教育の中で、佐久地域は看護や保健医療・福祉に従事する方が多い地域なのですが、特に女性で働いている方は看護師や、保健師などが非常に多い地域です。そこを目指している人が多いということであれば、高校の時から福祉とか、ケア、人を支えあう、地域社会を支えるという学びがあってもよいのではないのでしょうか。

しかしながら、現状として、大学に進んだ時にまだどの道に進んだらいいのか分からないけれど、なんとなく大学に行って人の役に立ちたいという人もいらっしゃると思います。そこも考えながら、大学は色々な工夫をして、佐久大もそういうコースや学部を作っています。

地域にある高校も、どこに将来を見据えているのか考えながら高校づくりをしていく必要があります、例えば産業のこと、大学進学のこと、暮らす人々のことを併せて考えていくべきだと思います。

(柳田座長)

ありがとうございます。他にはいかがでしょうか。

ないようですので、続きまして、ポイント③「佐久地域が期待する学びの場」についてでございます。

このポイントについては、県教育委員会の高校改革実施方針の中で、「多様な学びの場」を例示しています。これを事務局から説明いただき、これを踏まえながら、佐久地域の中学生の期待がどこにあるか、意見交換したいと思います。

それでは、事務局から説明をお願いします。

(事務局 駒瀬長野県教育委員会事務局高校教育課教育主幹)  
資料4に基づき説明

(柳田座長)

ただ今説明がありました。委員の皆様からご意見をお願いします。

(西部委員)

私は、塩尻志学館が総合学科になりたての頃、松本で塾の講師をしておりまして、その時の総合学科は爆発的に人気が出ました。今はどうなっているかは分かりませんが、その時のニーズを捉えることで1年であつという間に高校のイメージが変わりました。先ほどの学習を選択できる高校ということでは、塩尻にもこういう高校がありますので、研究していただきたいと思います。

また、先ほどの色々な体験をするということでは、小学校、中学校では「信州型コミュニティスクール」というのがございます。まだ試行錯誤の段階ではあるのですが、私の子どもも通う小学校、中学校では、学校応援団という形で、PTAや地域の方に入っていて、職業体験などをやっています。そういう外部のそれぞれの高校を支える団体がもう少し組織化されると話がスムーズになってきたり、話し合う機会が増えてきたりするのではと思います。

現状やっているところもあるかと思いますし、検討しているところもあるかもしれませんが、高校も地域と密着する形づくりをシステムとしてやっていただけると、先ほど言った善意が集まる器ができるかと思います。地元の人ができるが一番いいのですが、可能であれば高校や県の方でも検討いただければと思います。

(柳田座長)

ありがとうございます。他にはいかがでしょうか。

(由井委員)

お伺いしたいのですが、野沢北高であれば私が入学したときに新しくできたので、ものすごく古いものです。そのため、今の高校生にとって使い辛い状況になっているのは当然のことかと思えます。

これから再編したときに、新しい校舎を作るというようなことになったときに、現状の敷地にこだわるのか、それとも新しい場所を求めてやるのか、もし新しい場所でやるのであれば、現在の敷地をどうするのか、近年の事例として新しい場所に高校を建てて元の敷地を宅地にしたような事例は、全国では無いのでしょうか。

(柳田座長)

一般論で構いませんので、県教育委員会から回答をお願いします。

(事務局 駒瀬長野県教育委員会事務局高校教育課教育主幹)

再整備計画の後に、各高校で新校準備委員会というのを組織する中で、どこに校舎を作りましょうという議論になっていくかと思います。その時に、地域の状況、学校の状況に合わせまして、今ある高校の敷地で建て替えるのか、もしくは新たな場所を探して作るのか検討することとなるかと思います。

(由井委員)

例えば3つの高校が1つになってしまうというような大きな統合があった場合、3か所に分かれていた学校にそれぞれグラウンドや校舎があって、それが1か所に集まれば本当にいい学校ができるのではないのでしょうか。無駄な土地がなくなったり、1つにすることで他の土地が余ってそれを別のことに使えたりすればいいと思います。

それと、高校再編においては、学力の差や学ぶ内容が違うということで、それが障害になることもあると思います。しかし、例えば大学というのは、工学部もあれば農学部や文学部もあり、様々な学部があって偏差値も違って、一つの学校になっています。高校がそういう形でもいいのではないのでしょうか。進学コースと工業コースのように色々なものが混ざった高校がどうしてないのでしょうか。今、世の中は、多様化していますので同じ人だけ集めて、進学希望の人だけ集めるのもどうかと思いますし、色々な人が集まって、一つの高校ができていく方がかえっていいのではないのでしょうか。そういう観点も高校再編には必要かと思います。

(柳田座長)

ありがとうございます。他にはいかがでしょうか。

(相馬委員)

私は事業をしております、佐久エリアで100人ぐらい、長野エリアで100人ぐらい従業員がいます。それぞれに家庭があって、色々な人間がいます。本当に長野県だけの小さな会社ですが、飯田にも店がございます。そういう意味では各地域を平等に見ることができるかと思っております。

その中、今、由井さんがおっしゃったことは、国の教育システムが変わらなければ、現実的にこの地域だけ先行しても仕方がないと思います。例えば、埼

玉の浦和高校は男子校ですし、浦和第一は女子高として公立高校として残っています。正しいことかは分かりませんが、それをよしとする地域も現実にあります。長野高校も最近120周年となったのですが、そうそうたる卒業生がいて、その積み上げから色々なものが生まれています。やはり伝統というものも必要だと私は思っています。

長野にいる社員の子どもで実際にいるのですが、長野でも、長野高校を出て東京の大学に行って戻ってこない、こういった問題は、佐久地域と同じように抱えています。長野県全体で同じような問題があるかと思えます。優秀な子どもの帰ってくる受け皿をどうやって作るかというのは、大きな課題かと思えます。

また、小海など南佐久からも通える、例え先日の台風19号のような災害があっても通えるような高校を地域内に、佐久全体の地域校として意識して高校を残していかないといけないと思えます。

(柳田座長)

ありがとうございます。他にはいかがでしょうか。

(吉沢委員)

前回のこの会議の中で、高校教育課から高校改革実施方針について説明をいただきました。その中に通学区別の再編の方向が書いてありましたが、一つ確認と共有をさせていただきたいと思えます。

実施方針の41ページ、旧第6通学区の再編計画の方向の黒丸の3つ目、「小諸市と佐久市に適正数を考慮しながら規模の大きさを生かした都市部存立校を配置する」と県教育委員会の方向として書かれています。

確認したいのは、適正数という言葉なんですけど、普通は学校の数が多すぎないか、少なすぎないかということを考えるかと思えます。県教委として何か適正数に関する考えがあるのか、その辺を抑えておきたいと思うのですがいかがでしょうか。

(柳田座長)

県教育委員会から回答をお願いします。

(事務局 駒瀬長野県教育委員会事務局高校教育課教育主幹)

ただ今のご質問にお答えします。

「小諸市と佐久市に適正数を考慮しながら」とありますが、先ほどから議論にも出ておりますように、学校規模が小さくなるということを踏まえると、佐

久市、小諸市の中でも適正数を考慮した高校が必要でないのかということになるかと思えます。

(吉沢委員)

要は、子どもの数が減っていく中で、学校の数が多すぎないように考慮してほしいということかと思えます。

もう一つは、「規模の大きさを生かした」とありますが、私はある程度の学級数のある高校とイメージしましたが、それでよろしいのでしょうか。

(事務局 駒瀬長野県教育委員会事務局高校教育課教育主幹)

それでよろしいかと思えます。

(吉沢委員)

本日の会議の最初で、小諸商業高校と小諸高校の統合に向けた実行委員会の話がありましたが、そのお話と、今県教委に確認させていただいたことは、方向性が一致しているのではないかと私は思いましたので、改めて申し上げさせていただきます。

(柳田座長)

ありがとうございます。他にはいかがでしょうか。

(関委員)

①、②とも関わるのですが、色々なお話を聞いておきまして、これからの子どもたちには、情報、知識、技能中心のものから、情報を活用する力や、表現する力、コミュニケーションを取りながら自己理解をして、探求し、個性を生かしていけるような、自分を実現していくような力が求められると思えます。

私たち中学校長は、高校に送り出す立場にあるのですが、生徒にも多様な個性がございます。成績も450点採れる子もいれば、300点ぐらいの子、200点や100点ぐらいの生徒もいます。そういう子たちがそれぞれどのように進学するのか、中には将来の目的意識がはっきりしている子、自分はどうなりたいから、高校に行こうしたいといことがある子と、そこまではまだ考えられなくて、普通科の高校に行こう先を見据えたいという子もいます。

また、最近では、学校になかなか来れない不登校傾向の生徒や、発達障がい傾向をお持ちの子もいます。そういった多様な子どもたちのために、多部制や選択制、通信制といった形で対応いただいているのはありがたいなと思えます。今後もさらに取り組んでいただければと思えます。

また、勉強、部活動、芸術や技術分野、活気があるといった特色というのも、学校を選択する理由になるかと思います。取り組んでいることに特色があつて、個性を生かしていけるというのがあれば、生徒も高校を選択できるのではないかと思います。

ただ、実際、佐久地域は非常に広域で、通学という問題は非常に大きいと思います。前回の会議で掛川委員から寮というお話がありましたが、他地域から来ていただくだけでなく、私は南牧村なのですが、川上村や南牧村から通うのは非常に時間がかかりますし、その分勉強したいという思いもあるので、そういったものも考えていただきたいと思います。

また、南牧村の産業を考えますと、酪農や農業になります。そういったことを学びたいということで、北海道の高校に進学した子もいます。さらには、山梨の方が少し近いので、公立で寮のあるような山梨の高校に行く子もいます。高校の先に進学したいという思いがあるので、それも選択の理由になります。佐久地域でも群馬のほうに行ってしまうということもありますし、全体として考えていただいて選択肢を持てるような再編にしていいただければと思います。

(柳田座長)

ありがとうございます。他にはいかがでしょうか。

せっかくですので、私も発言させていただければと思います。佐久市でメディアに関するアンケートを毎年採っていますが、小学生と中学生の将来なりたい職業の中に、コンスタントに医療従事者とか、医者というものがベスト3に入ってきています。これは、佐久市の特徴ではないかと担当の教育委員会で色々と分析をしてくれているところです。地域特性というものが児童生徒の中に芽生えることができ、その方向に関心を持つということであれば、大変嬉しいことだと思います。

そして、選択肢をこの地域で備えていこうということに賛成とする中で、選択をする力というものを子どもが持って欲しいものだと思います。そのためには、地域特性を知ることができたり、選択肢があること、この社会においてどういうことを大人になって自分が役割を果たすことができるのか、あるいは自分自身はどんな能力に卓越性があるのか、というようなことを知ることが生徒時代にできたならば、大変嬉しいことだと思います。そういったことが寄り添うということであつたり、学校が持つ導く力であつたり、その子の持っているものを引き出す力、そういうことだと思います。このことを念願してキャリア教育というものも実践されたり、小諸高校、小諸商業で議論されたコンソーシアムというものも期待されているのではないかなと思います。この議論の末にはそういったことにもたどり着くのではないかと思います。

また、こういった地域の特性、その子の卓越性を生かしていくためには、先生方の熱意とか、知識とか、情熱とか、こういうことも欠くべからざる要素だと思います。これは、佐久地域の高校に望むというよりも、高校教育という意味では、ご努力はされていると思いますが、長野県教育委員会において、再編の議論にぜひ加えていっていただきたいと思っております。佐久地域の高校に望むこととして少し発言をさせていただきました。

ポイントの3つ目につきまして、加えて何かございますでしょうか。よろしいでしょうか。

以上で意見交換を終了したいと思います。ご熱心に意見交換をいただき、誠にありがとうございました。

## 5 連絡事項

前回要望のあった高校の見学について

## 6 その他

次回開催について

第3回 令和元年12月25日(水) 10時から  
佐久市役所議会棟2階全員協議会室

## 7 閉会